特集 シリーズ／JLTFいまむかし その②

「全国レディーステニス大会」の発展とともに

全国組織の基盤を作りあげた日本女子テニス連盟

ー前編ー

第46回目を迎えた「全国レディーステニス大会」。1979年に第１回大会を開催してより大会名や会場を変え、現在は「ソニー生命カップ全国レディーステニス大会」として「有明テニスの森公園」で開催されている。

実は我が日本女子テニス連盟（以下JLTF）の活動基盤である全国47都道府県支部は、この「全国レディーステニス大会」の開催がきっかけとなり、次々と設立されていった。今特集では、両者が二人三脚のように発展を遂げてきた歴史を振り返ってみたい。

「全国レディーステニス大会」は こうしてスタートした！

同大会の過去のプログラムに掲載された「朝日レディーステニス10周年記念座談会」によれば、同大会が開催されるまでには、次のような経緯があった。

創業100周年を迎えた朝日新聞社では、全社的に記念行事を行うことになり、当時、ママさんバレーと共にブームになっていた硬式テニスに着眼した。そして同社の記者らが日本テニス協会に「甲子園の高校野球と同じよ

うなトーナメント方式で、主婦を対象としたテニスの全国大会ができないか」と相談を持ちかけたのが始まりであったという。

日本テニス協会ではこれを快諾して運営を引き受け、地方大会を開催するためのサポートを各都道府県テニス協会とJLTFに頼んだ。

一方、1968年に全日本選手やそのOGたちを中心に発足したJLTFはその頃、会員数が2000人以上になっていたものの、支部は東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城の5都県にあるだけだった。JLTFにも全国組織として活動を広げていきたいという強い思いがあり、同大会の運営協力を引き受けたという。

朝日新聞社では当初、県予選を行えるのはせいぜい25県くらいだろうと予想していた。ところが蓋を開けてみると、35都府県で予選大会が行われ、残りの12県も県協会の推薦で代表を送り出して来た。そして第1回全国大会では、全国47都道府県の代表選手がプラカードを先頭に堂々と行進したのである。

故宮城黎子元JLTF会長は「同大会20周年記念座談会」の中で、「第1回の頃は支部がなかったので、予選ができない県や県協会が主になって予選をしたり、男子が監督を務める県もあった。それが回を重ねるごとに地方の意識が進み、自分たちで支部を作って代表を送ろうと、練習会や小さなトーナメントを行ったりして活動が進んだ。大会を目ざして練習に励む女性が増え、テニスのレベルもあがった。この大会がなければこんなに早く全国に支部ができていなかった」と語っている。

また故飯田藍JLTF名誉会長も同座談会の中で「団体戦ということで、県の代表で来る楽しさと、チームワークができるメリットがあった。（全国決勝大会は）各県から団体で来る方々の良い交流の場となり、女子のテニス技術もレベルアップしている。選手経験者は後に支部活動を手伝い、JLTF全体を支えていくケースが多く、JLTFが組織を固めていくのにすごく役立った」と語っている。

第1回大会は選手団の宿舎が品川プリンスホテルであったことから、試合は同ホテル内にあった高輪スポーツセンターのインドアコートで行われた。第2回大会の会場はトピレックプラザテニスコートとなったが、屋外コートだったために雨にも悩まされたという。

そして第6回大会からは朝日生命が協賛となり、「朝日レディーステニス大会」という大会名で、朝日生命久我山コートにて開催されるようになった。以後、当大会は全国の社会人女性（参加条件は年ごとに変化）が、頂点を目指す大会となっていったのである。

この大会の発展とともにJLTFの支部設立も進み、第2回大会では初回の5支部に加えて静岡、岡山、京都、北海道の計9支部が設立。3回大会（1981年）では青森、沖縄、大分、秋田、滋賀、富山を加えた15支部。4回大会

では栃木、福岡、愛知、宮崎、福島、佐賀を加えた21支部。連盟発足15周年の1983年に開かれた5回大会では岐阜、長崎、広島、鹿児島、高知、愛媛を加えた27支部。6回大会では32支部。JLTFが主管となった7回大会では35支部。8回大会では38支部。連盟発足20周年となる9回大会では40支部。そして1990年10月には全国47都道府県に支部が設立され、11月の全国大会には全支部から代表選手が参加したのであった。

「全国レディーステニス決勝大会」に出場した皆さんにインタビュー

第2回大会の開会式

第１回大会より、朝日生命の久我山コートで全国大会が行われた第23回大会に出場した皆さんに、当時の思い出を語っていただいた。

★第１回大会出場　　和歌山県代表　津嶌　淑子

県代表になりたかったので３位決定戦に勝てた時は本当に嬉しかったです。第1回の会場は品川の室内コートでしたが、当時の私のテニスは、試合中は殆どロブ。チームメイトの皆から「ロブが天井に当たらずスレスレに上がるから凄いね」と言われたことが１番の思い出です。和歌山のような地方では選手人口も少ないので、県の代表になるのは楽ですが、全国大

会ではなかなか２回戦突破は難しかったです。東京に帰って来てから、代表になる事の大変さがわかりました。

★第１回大会出場　　神奈川県代表　飯尾　尚子

チームの６人とも代表になれたことが嬉しく、よく一緒に練習をしたし、ユニフォームも手づくりして楽しかったです。当時は朝日新聞社の宣伝もあったせいか、色々な方々から思いがけない応援をいただき、今でも感謝しています。私たちの頃は専業主婦の選手が多かったのですが、いまの方々は仕事をしながらテニスも頑張っていて頼もしいですね。この大会のお陰で全国のテニスレディースと交流できて、行動範囲が広がりました。

★第２回大会出場　　神奈川県代表　間宮　茂子

第１回大会の終了後に姑（間宮千里・現在98歳）から来年の第２回全国レディースに出場したいと誘われ、産後６ヶ月で練習を開始しました。思うようなプレーが出来ず、姑の頑張りで代表となって何もわからないまま参加した大会でしたが、初優勝という嬉しい結果で終えることできました。皆様のサポートがなければ成し遂げられなかったと思います。出場した全国大会はまだ第２回目で、不慣れなことが多く大変でしたが、現在は練習コートや練習相手のセッティングなど、大勢の卒業生はじめ皆様のサポート力があって、羨ましい限りです。

★第３回大会出場　　岩手県代表　菊池　寿子

当時は、独身女性の参加資格は30歳以上と決められていました。入会したスキークラブで夏場、体力作りのためにテニスを取り入れていたことから、全国レディース県大会出場をめざすことになりました。テニス歴2年でフォアハンドしか打てない私が、前年度のNo.3の方とペアを組むことになり、県大会のドローは第2シード。プレッシャーで眠れぬ夜が続きましたが、念願の全国大会出場を勝ち得ました。今思えばあの時は、「嬉しい」より「いかにして恥をかかずに済むか」という情けないものでしたが、その経験を経て私のテニス人生に火が付いたと言っても過言ではありません。当時の全国大会で思い浮かぶのは、ホテルの豪華さです。当時は新宿ヒルトンホテルでしたが、部屋も会議室付きのVIPルームなどと目を疑うほどで、全国大会出場とはVIP待遇なんだと勘違いをしたほどでした。

★第4回大会愛媛県、6回大会和歌山県、9､10回大会千葉県代表　　境　真由美

夫の転勤で愛媛の宇和島に行き、テニスを始めて、全国の代表になれば実家の東京に行けると思い県大会に参加しました。全国レディースは当時

「おばさんの甲子園」と呼ばれ、ドローもシードもあって大都市圏が優勝しやすかったように思います。現在も相変わらず大都市圏が優勝していますが、1回戦が東西対決になっていますね。

私が出場した頃はクレーコートで、ウエアは白の半袖にスコートかショートパンツで、素足にソックスでした。記録を見る限りでは、サポーターなんてしている人は居なかったように思います。現在はスパッツ、アンダーパンツにアンダーシャツを着てカラフルなウエア。紫外線が怖いので仕方がありませんが、昔の写真を見るとやはり白いウエアは素敵だと思います。

★第５回大会出場　　神奈川県代表　関場　和子

神奈川県は前年までの全国大会で3連覇していたため、その中で県代表になるのは夢のまた夢でしたが、準優勝して代表になることができました。嬉しさとともに先輩たちの好成績がプレッシャーでしたが、全国大会までの練習会でずいぶん鍛えていただき、楽しかったことが思い出されます。

会場のトピレックプラザコートは屋内施設がなく、大会最終日はあいにくの雨となって急遽、品川の高輪テニスセンターに移動したのですが、細切れでしかコートを借りられず、連続で試合が出来ませんでした。結局、全国大会は第３位で、私たちには卒業という最高の結果となりましたが、なにかやり残し感もありました。その後は選手としても、女子連や県･市協会の役員等もさせていただき、多くのことを学ばせていただきました。

★第８回大会出場　　青森県代表　種市　文子

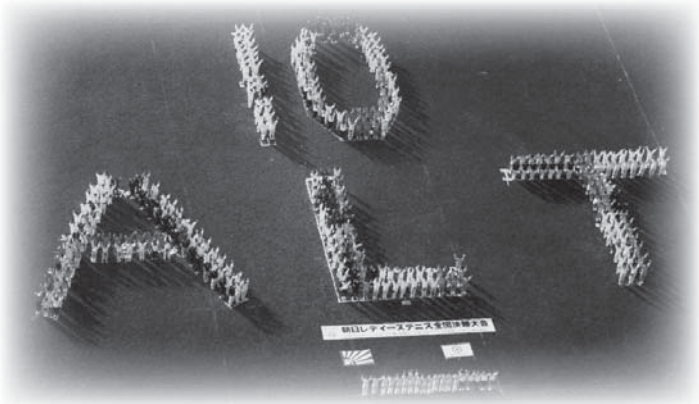
全国レディース出場時は32歳でした。女子連で最高の目標の大会だったので、同じペアですべての大会に参加し、良い点・悪い点を指摘しあって

ペアリングを構築し、代表になったときの喜びは今でも忘れられません。朝日生命久我山コートでの開催でしたが、宿泊·レセプションパーティーが新宿ヒルトンホテルで、コートまでは貸し切りバスで全員移動、今では考えられないほど豪華で夢のような一日でした。

試合は緊張して自分たちのテニスができずに終わってしまいましたが、全国レベルに接し、ますますの努力が必要と痛感して帰ってきました。現在では情報共有ができて地方のレベルも上がってきていますが、日本全体のレベルも上がっていますし、首都圏に比べて、若い人たちがテニスをし辛い環境ですので、地方からの優勝はますます厳しそうですね。

★第10回大会出場　　**富山県代表　ハッ橋　幸代**

娘を出産したばかりの24歳の頃、当時の支部長さんから全国レディースの富山県予選大会に出る事をすすめられ、何もわからないまま3位となり全国大会に出場しました。1歳になったばかりの娘を預けて東京に行くことができず、母親に一緒に付き添ってもらっての出場となりました。朝日生命のコートで入場行進などもあり、盛大な開会式でした。テニスウェアも白が基調と服装など厳しい決まり事がたくさんあり、現在はカラーのウエアも認められ華やかになったと思います。女子連の事を何も知らないで出場したので、皆さんからのサポートが大きく感謝しています。



第10回大会に人文字で作ったALT「Asahi Ladies Tennis」の空撮写真

第10回大会の会場であった朝日生命久我山テニスコートでプレーをする選手達

★第10回大会出場　千葉県代表　松内　信子

テニスを始めて日本女子テニス連盟に加入し、目標としたのは全国レディース（朝日レディース）の県代表になる事でしたので、県代表になった時は嬉しかったです。当時は全員上下白のテニスウェアで、皆さん清楚でした。バブル真っただ中だったので、懇親会も宿泊ホテルもヒルトンホテルで豪華でした。

★第11回大会出場　埼玉県代表　海田　久美子

テニスを初めて３～４年で先輩から声を掛けられ、全国レディース大会に参加して、２度目で県代表のNo2になりました。信じられなかったですが、ペアが上手だったせいでしょうか。全国大会に向けての練習会では、No １・３ペアのレベルの高さに落ち込むこともありました。全国大会では、朝日生命久我山コートにてたくさんの応援を頂き、あがってスコアがわからなくなったりしました。団体戦であるお陰で、4位の成績で卒業することができましたが、その時の気持ちは複雑で、もっと上達して次のステージに行きたいと強く思いました。

★第12、18、19回大会出場　岐阜県代表　名里　美穂子

何となく出場した県予選は、お顔も知らない方達との試合でしたが、楽しいばかりでした。30才を過ぎ、全国大会のために初めて東京へ行きましたが、東京駅や電車の中で出会う選手を見て強そうでドキドキしました。テニスをする事に反対していた家族全員が、最後は喜んでくれたことが嬉しかったです。

大会前日の抽選会では、いっぱいのご馳走でおもてなしをして頂き、当日はヒルトンから有明の森コートまで送迎バスで移動。こんなに良い待遇でテニスができるならまた頑張りたいと思いました。あの頃は選手だけでなく、スポンサーや役員ともお話しして友達にもなれました。現在は、選手も若くなりましたが、試合以外で皆さんが一同に会する場所が無く、地方から出て来た選手が、行って帰って来るだけになっているのが寂しいです。

★第17回大会出場　秋田県代表　片岡　富子

大会前日のレセプションはとても賑やかで、違う世界に踏み込んだようでした。当日は、どのような大会なのかも想像がつかないまま、チームの皆さんと新宿からバスで久我山のコートに向かいましたが、曇り空から雨模様の暗い1日で、敗者戦に回りました。初めての全国大会出場は、嬉し

さと不安、子育てからの解放感と、幼い子供たちを母に預けてまで参加した後ろめたさが混在していましたが、結果、ますますテニスに夢中になり今があります。全国大会はおばさんの甲子園と言われ、当時はジュニアから始めた方は少なく、特徴のある打ち方をしている方が多かったですが、近年は更にダイナミックにレベルも高くなっていると感じます。まさか有明で全国決勝大会ができるとは感激でいっぱいですが、「テニスの聖地」への移動もずいぶん楽になりました。

★第19、22、27、35、37、39、44、45、46回大会出場　愛媛県代表　竹内　利恵

初めて出場した27年前、学生時代にかなわなかった全国大会に出場できることにとてもワクワクしました。その後は子育てと仕事で忙しく過ごしながら、全国レディースにチャレンジをしてきましたが、昔も今も「ここで勝ちたい！」と思わせてくれる大会です。

30年間の子育てを終え、満足感とともに一抹の寂しさも感じますが、忙しい日々の中、テニスコートに私の時間があった事、子育てだけでない私自身の人生がそこにあった事を今、本当にありがたく思うのです。

全国大会出場を応援してくれた家族や友人、女子連支部の方々、朝日レディースから全国レディースへと歴史をつないでくださった本部の方々にとても感謝しています。テニスをする女性の励みとなる「全国レディース大会」が末永く続くようお祈りしています。

★第22回大会出場　広島県代表　柏木　敦子

初めて県代表になり、嬉しいと共に子供たちや家族に負担をかけるという不安と入り混じった気持ちになりました。でも県の強化練習会等を経ていくうちに全国大会への期待が高まっていきました。

1回戦の相手は千葉だったのでコートの回りは二重三重の人垣で囲まれ、すごい声援。そんな中での試合は初めてで、あっという間に1セット終わっていました。当時は3セットだったので何とか挽回することができましたが、2回戦は雨が降り、室内コートに移動。待ち時間が長く試合終了は夜11時前になりました。足が痛くなりましたがトレーナーの方に処置をしていただく時間もなく、体力的にも厳しかったです。ですが運営の方はもっと厳しく忙しかっただろうと、いま思うと感謝しかありません。強烈で貴重な思い出と一生の友人を得た3日間でした。

★第23回大会出場　神奈川県代表　税田　桂子

県予選を勝ち上がり、全国の代表の方々と試合ができることに、喜びでワクワクしました。会場は現在とはちがい、観戦応援のみなさんが居る場所も広く、全員で盛り上がっていたような思い出があります。

（取材／澁川貴子・保坂澄子　文／善田紫紺）